



## 教科書で言葉について学ぶ

本校の校内研究は、これまで算数科を中心に取り組んできました。昨年度は管内教育論文校内研究小学校の部で最優秀賞を受賞したことを区切りとして、本年度からは全ての教科等の土台となる国語科を中心に授業研究に取り組み始めています。

その第一弾となる研究授業を5年生担任の研究主任が14日に行います。先日の事前研究会で研究主任が授業展開の構想を提案しました。5年生が教科書で学んでいるのは、(言葉の発達のしかたや、学びの仕組みについて研究している今井むつみさんという心理学者の書いた)「言葉の意味が分かること」という説明的な文章です。

今井さんは日本語の「食べる」と英語の「eat」は似た意味の言葉ですが、意味のほんいがちがうのです、と述べ、さらに日本語や英語以外の言語(韓国語や中国語)についても例示しています。

今回この文章に初めて出会った私には思い出した文章があります。

それは鈴木孝夫著『ことばと文化』(岩波新書1973年)にある「のむ」とdrinkの構造の比較、という部分です。

筆者の鈴木さんは、まず日本語の「のむ」(飲、呑、嚙、喫など)という動詞は、一体どのような条件の下で使われるかを考察しています。

次に、「のむ」と正に対応すると考えられている英語のdrinkについて同じように使用条件を調べています。

鈴木さんは言語学の入門書と呼ばれる

上記の『ことばと文化』などで知られる言語社会学者(1926年～2021年、慶応大名誉教授)です。私が持っている上記の新書は1982年の第16刷ですので、19歳のころに読んだものです。こうした言語学の入門書に通じる文章を小学5年生が教科書を読んで学んでいます。

学習指導要領解説では情報の扱い方に関する指導の改善・充実として次のように述べられています。

(前略)一方、中央教育審議会答申において、「教科書の文章を読み解けていないとの調査結果もあるところであり、文章で表された情報を的確に理解し、自分の考えの形成に生かしていけるようにすることは喫緊の課題である。」と指摘されているところである。

話や文章に含まれている情報を取り出して整理したり、その関係を捉えたりすることが、話や文章を正確に理解することにつながり、また、自分のもつ情報を整理して、その関係を分かりやすく明確にすることが、話や文章で適切に表現することにつながるため、このような情報の扱い方に関する「知識及び技能」は国語科において育成すべき重要な資質・能力の一つである。

こうした資質・能力の育成に向け、「情報の扱い方に関する事項」を新設し、「情報と情報との関係」と「情報の整理」の二つの系統に整理して示した。

教科書の文章を読み解くにも日々の生活体験の中で言葉の意味について深く考える習慣があるとよいと思います。

明後日は5年生が教科書の文章をもとに話し合う活動を通して、どのような学びの姿を見せてくれるのかがたのしみです。